

和紙職人入門

日程 平成22年 8月18日(水) 19日(木) 20日(金)
26日(木) 27日(金) 全5日間
内容 こうぞから紙ができるまでの工程を体験する
和紙を利用した時計作りに挑戦する
講師 福岡洋介氏、福岡小次郎氏(大ヶ蔵連町)
参加者 4名(小5・2名、小6・2名)

1日目



豊田市役所からバスに揺られること約1時間、豊田市小原地区にある福岡小次郎さんの工房へ到着しました。工房に入ると、小次郎さん、洋介さんが笑顔で迎えてくださいました。

あいさつをすせると、まず洋介さんから時計製作の工程について説明がありました。子どもたちは考えてきた時計のデザインを拡大して板に書き写し、のこぎりで切りぬく作業に取り掛かりました。曲線を多く使ったデザインを考えた参加者は苦戦していましたが、職人さんに手伝ってもらいながらなんとか切り終え、裏張りの作業へ取りかかりました。板に直接色のついた和紙を張ってしまうと次第に木からあくが出てきて和紙の色が変色してしまうため、下に1枚和紙を張るのだそうです。

2日目

2日目です。今日はそれぞれのデザインを和紙で描いていく作業です。まずこよりを使って曲線部分を縁取り、スポットで色のついた繊維を流していきます。時計作りのメインの作業ということもあり、参加者も集中して取り組みました。

予定よりも早く作業が進んだので、午後からは和紙のふるさとへ見学に行きました。工芸館にある巨大な乾燥機を使い、午前中にすいた紙を乾かします。参加者は工房よりも規模の大きい設備に驚いていました。続いて展示館を小次郎さんに解説してもらいながら見学しました。小次郎さんが製作した和紙で作られたカヌーや、藤井達吉が残した多くの作品、また、現在の小原和紙作家の個性的な作品を数多く見ることができました。



3日目



3日目です。まず山内裕三さんの畑に生えている山こうぞを刈りに行きました。岩場に生えているため、山内さんに刈っていただくことになりましたが、小原産のこうぞを収穫することができました。次に小原和紙工芸の祖、藤井達吉が共同工房を建てた鳥屋平（とやがひら）を見学しました。小次郎さんから達吉が小原に来た経緯や、芸術を志す若者達を厳しく指導したことなど、現場を見ながら臨場感ある説明を聞くことができました。

工房に帰ると先ほど収穫したこうぞを加工する作業に入ります。こうぞをなべの長さにあわせて切り、煮て、皮をむきます。続いてタクリといって、小刀を使い皮の黒い部分を削っていきます。全てのこうぞを加工するので、根気のいる作業となりました。

4日目

4日目です。まず時計の針の部分を取り付ける作業を行いました。針の部分はデリケートなので、慎重に行います。この作業で時計は完成ですが、どの参加者も考えていたよりも難しいと感じたようです。時計作りをとおして自分のイメージを形にする難しさを体感することができたのではないのでしょうか。

タクリが終わったこうぞは、さらに細かい汚れを取り、ハンマーでたたいて繊維を細かくします。力が必要で、一度にたたけるこうぞの量も限られているので、体力的にきつい作業となりました。

細くなった繊維はトロロアオイと混ぜ、畳一畳はあるであろう大きなスコテですきました。スコテをあやつる小次郎さんの手つきがとても印象的でした。



5日目



最終日です。昨日すいた巨大な和紙をハガキ用に分厚くするため重ね、のりで接着します。シワができやすく、何回も失敗しながらの作業になりました。乾燥させ、ハガキのサイズに切りそろえスタンプを押し、見事ハガキが完成。こうぞの木からいくつもの作業を経て完成した、貴重なハガキです。

時計は昨日完成していますので、和紙を利用したランチョンマットを急遽作らせていただきました。ラメや花形の和紙を使って、かわいらしい4つの作品が出来上がりました。

最後にお世話になった工房を掃除し、挨拶をして今回の講座は終了。今回参加してくれた4人には、紙ができるまでにかかる苦労や、妥協しない職人さんの姿など、この5日間に見たこと、感じたことを忘れないで、また思い出してくれたらと思います。